

補正

「武寧王陵出土鏡と七子鏡」

の補正(史林五五卷四号所載)

樋口隆康

前号に、上記の論文を発表した直後、筆者は韓国政府の招待をうけ、武寧王陵出土鏡を実見する機会を得た。それによって、より詳しいデータを知ることができたし、また、写真だけの観察で、不十分であった所を補正することができたので、具体的事実のみを追記しておきたい。

まず、武寧王陵出土鏡は四面ではないかという朴春錫氏の見解を紹介していたが、金元龍氏の教示によれば、うち一個の破片は鏡ではなかったとのことであるので、『特別展覧図録』にあった三面が、武寧王陵出土鏡の全てであるということになる。

この三面の出土位置は次の通りである。1、浮彫人物獣文四神鏡は、王の足元から

で、2、獣文縁細線式七獸帯鏡は、王妃の胸辺からで、3、唐草文縁薄肉七獸帯鏡は、王の頭辺からでた。

浮彫人物獣文四神鏡の浮彫文は、一つの人物像と、四つの獣形である。人物像は結髪して、フンドシをしめた半裸の人物が、両手に槍をかまえて、進んでいる形である。私がおう一つの騎馬人物像と見誤ったのは、実は顧首の獣形で、その頭の上方に飛びだした耳の一つを、騎乗の人物の胴体と思っただからであった。不鮮明な写真からの観察の不備であった。

細線式七獸帯鏡の径は一八・一センチ、薄肉刻七獸帯鏡の径は二三・二センチあり、後者は、他の同型鏡と殆ど同大であることを確認した。また、鈕をめぐる九個の小孔の間には「亘」「子」「孫」の三字と禽形文があることも、確認され、滋賀県三上山下古墳出土鏡と同じであった。

なお、三面とも、同じように鉛銅質で、黄緑色のさびにおおわれている。

以上は、実物を実見した成果であるが、正式な報告書作製前に、特別調査の便宜を

はかられた韓国国立博物館の尹武炳、韓炳三両氏に対し、心から感謝したい。

一九七二年八月二十五日印刷
 一九七二年九月一日発行
 定価四五〇円

史林 (第五五卷第五号)

京都市左京区吉田本町
 京都大学文学部

発行人 史学研究会
 理事長 羽田明
 振替京都五一五五番

印刷所 中村印刷株式会社
 京都市下京区西七条御所ノ内中町五〇